

観光イベントにおいて構成・表象される祭礼 —長野県諏訪地域の御柱祭を事例として—

石 川 俊 介

Festival, Simulated and Represented in Sightseeing Promotion Events
—Case Study on Onbashira Festival in Suwa District, Nagano Prefecture—

Shunsuke ISHIKAWA

要 約

1990年代以降の観光人類学・観光社会学の研究を概観すると、観光という文脈（コンテキスト）において構成・表象される地域の文化・民俗を記述し、「真正性」に関する問題を分析・考察することが研究の主題のひとつになっていると考えられる。

観光イベントにおいては、地域の祭礼がイベントの目的に沿って構成され、観光商品のひとつとして表象されることがある。イベントの文脈においては、「本番」ではあり得ない構成でも、その場限りのものとして許容されていると考えられる。イベントを構成するヒトやモノなどの要素の各々は「真正」であるが、その構成のされ方が「本番」とは異なると言える。

本論ではこのような視点から、長野県諏訪地域の祭礼である「御柱祭」の観光イベントを検討する。6年に一度、寅と申の年、諏訪大社をはじめとする地域内の神社等で行われる「御柱祭」は、遅くとも1950年代後半から観光資源として活用されるようになった。

諏訪地域の外で開催されたイベントでのフィールドワークをもとに、観光イベントという文脈において、どのようなヒトとモノが動員され、「御柱祭」が構成・表象されているのかについて、本論では明らかにする。「本番」では決して出会うことのないヒトやモノが組み合わされることによって、観光商品としての「御柱祭」が生み出されているのである。

キーワード：観光イベント、観光商品、祭礼、表象、真正性

はじめに

祭礼には観光客がつきものである。しかし、令和2（2020）年初頭から国内で始まった新型コロナウイルスの感染拡大、いわゆる「コロナ禍」は、祭礼を対象とした観光に大きな影響を与えている。令和3（2021）年11月時点においても、多くの祭礼は観光客を積極的に呼ぶことを自粛している。筆者が研究する長野県の諏訪大社御柱祭も同様である。多くの祭礼は、感染対策を徹底したうえで、地域社会の日常に埋め込まれ直されつつあるが、それが観光の対象となる段階には未だに戻っていないように見える。本論は、観光が「停止」した現在において、観光イベントに着目することから、観光現象を検討するものと位置づけられる。

1. 本論の目的と問題の所在

本論の目的は、誘客を目的に行われる観光イベントにおいて、観光資源（観光商品）としての祭礼がどのように構成・表象されているのかを明らかにすることである。

観光イベントは本来の祭礼とは別の文脈に位置づけられる事象である。従って、祭礼の本番とは構成が異なることが想定される。観光イベントにおいてある祭礼を表象する場合、各イベントの文脈に沿った、ヒト（人的資源）とモノ（物的資源）の構成（組み合わせ）があると考えられる。イベントは、その主催者による企画・演出によって、ヒトとモノが構成される。祭礼を表象するという目的に沿って、その場限り構成による演目が上演されていると考えられる。誤解を恐れずに言うならば、観光イベントは「偽物」であり、「真正性」をもつものではない。この「真正性」に関する議論は、実がある視点とは考えられていない。しかしながら、観光イベントにおけるヒトとモノの構成¹が「真正性」をもたないとするならば、本番の祭礼におけるヒトとモノの構成にこそ、「真正性」があるともいえる。

筆者は、上社の御柱祭に奉仕する担当地区の「金沢・富士見」の富士見地区を主な調査対象としている。本論において事例とするイベントについては、筆者が平成21（2009）年当時に所属していた富士見町木遣り保存会における参与観察の一環として調査を行った。

2. 先行研究の整理

観光研究における「真正性」論

観光人類学、観光社会学など、観光研究における「真正性」をめぐる議論については、膨大な

1 場所や時間なども「真正性」をもつための重要な要素であると考えられるが、本論では検討せず、今後の課題としたい。

蓄積がある（ヴァレン・L・スミス編2018、山下編1996、橋本1999、2011、野村2014など）。「真正性（オーセンティシティ）」は、「本物らしさ」とも言い換えられるが、誰がどのような文脈で用いるかによって全く意味が異なってくる。橋本和也が「間主観的」（橋本和也 2011：22）な概念と呼んでいるように、客観的に措定できる概念ではない。野村がディーン・マーキャネル（マーキャネル2012）の議論を基に、「観光地の住人たちが自分たち自身のために忠実に作り上げてきた文化や伝統にあるとされる『オーラ』のようなもの」（野村 2004：201）と論じているのは適切である。重要なのは、「真正性」に囚われているのは、事象に関わる当事者であるとみなされていることである。観光者との交流などの外部の影響によって、当事者が生み出した自己認識的なものが「真正性」なのである。

他方で、観光者が観光用に構成・表象された見せかけの文化や民俗ではなく、「真正性」を求める事例があることについても、これまでの研究で数多く指摘されている。しかしながら、観光の現場においては、「真正性」論は居心地の悪いものである。橋本和也が述べているように、「観光の現場に提供されるパフォーマンスは、本来の文脈から切り離されており、『文化の真正性』の議論が観光の現場になじまないものであることは明白」（橋本 2011 2）と言える。確かに、当事者さえもが「本物」とは考えていないパフォーマンスを、当事者の実践や生活戦略として研究者等が称揚したり、墮落したものとして批判したりするのは的外れである。

つかみどころのないものであるからこそ、本論もそうであるが、「真正性」論には不思議な魅力がある。どこかに「本物」の文化・民俗があるはずだと、探し求めてしまうのが、研究者の性かもしれない。橋本裕之は、「解釈／再解釈（中略）する過程にこそ真正な文化現象を発見することができるはずである」（橋本裕之 1996 179）と指摘している。橋本和也も「提供者が地元の文化を伝えようとする気持ちが『ほんもの』だと評価される」（橋本和也2011 11）と論じている。「真正性」は思考や表現、相互作用のプロセスのなかにあるという考え方である。いずれにせよ、捉えにくいものであることは確かである。

このような捉えにくさは、「真正性」が「ブラックボックス化」しているためと指摘できる。周は、サブカルチャーの聖地巡礼研究を参考に、アクターネットワーク理論を援用して、教師や起業家などの訪日中国人が行う、日本でのスタディツアー「遊学」において、「匠の精神」というべきものが生み出されていることを指摘する（周 2021）。様々なアクター（情報）を組み合わせることで、学ぶべき教えである「匠の精神」を観光者自身が創造（想像）し、消費している。「匠の精神」は観光地にあるのではなく、観光者自身も含む様々なアクターの構成で生み出されるものとも言える。文化や民俗における「真正性」なる概念も、多様なアクターの相互作用によって生み出されている。しかし、その内実については問われることが少ない。「ブラックボックス」と化していると考えられる。

都市祭礼・イベント研究から観光と観光イベントを考える

「真正性」論から抜け出すことは難しい。本節では、その考えを相対化するため、都市祭礼やイベントについての民俗学的研究を検討する。

和崎は、京都の五山送り火のひとつである左大文字での調査をもとに、観光においては、「こじつけ、つまり類縁的な創造力」（和崎 1999：119）による「風俗」が消費されていると論じている。左大文字に関する宗教行事は、長い歴史をもつ「民俗」である。対して、「風俗」は「大文字セーブル」のような便乗や、行事とは関係のない「世界平和」と書かれた護摩木などを指している。「風俗」は都市民俗の周縁に位置づけられるものであるが、「民俗」を破壊するものではなく、下支えるものである。和崎は、風俗が民俗に便乗し、民俗が風俗を取り込むという、相補性をもった関係を「都市民俗の外延的展開」（前掲：118）と呼んでいる。

「風俗」は、直接「民俗」に関わるできない人々が関われる「開口部」であり、「民俗」への社会的理解を広めるものとして機能している。このような視点から「風俗」としての観光イベントを考えてみる。観光イベントは「こじつけ」が見られる場であり、「真正性」が問われる場ではない。また、「こじつけ」は、当事者・観光者双方で行われるものである。本物（オリジナル）と偽物（コピー）が問われることなく消費される「シミュラークル」（ボードリヤール 1992）として観光イベントを捉えることもできる。本物と偽物という「二項図式が失効していても観光は支障なく成立する」（野村2014：207）とも言える。

他方で、観光者が何を見て、何を見ないかをについて、見せる側が完全にコントロールすることは難しい。すなわち、当事者と観光者双方で「まなごしの線引き」（高岡 2021：45）が行われているのである。確かに、このような状況を「真正性」という視点で捉えるのは適切ではない。

民俗や文化は地域に根付く独自性をもつとされるが、そのような「民俗」への見方を越えた資源の流用によって生まれたイベントもある。山田は、徳島県勝浦町のビッグひな祭りについて、特色ある地域の民俗ではない、「一般的」な民俗の資源化が行われていると論じている。この地域おこしイベントの中心は、飾り付けられた大量のひな人形である。これを目当てに多くの観光客が訪れる。他方で、ひな人形についての「類縁的な創造力」により、様々な資源が動員される。古い雛人形の収集と展示、巨大な雛人形の製作と展示、雛供養などの民俗の流用、人形浄瑠璃など民俗以外の文化との接合などによって、イベントの内容は拡大した。加えて、町内外へのイベントへの雛人形の貸し出しや、他の地域の雛人形イベントの指導も行っているという（山田2013）。

（雛）人形をはじめとする様々な要素によって構成されるビッグひな祭りは、「真正性」や地域の独自性への固執を相対化する事象である。雛人形という要素を核として、「こじつけ」で様々な要素が組み合わされている。そこに本物か偽物という二項図式は存在しない。このイベントが続く理由は、雛人形や雛祭りという、多くの人々が共有している「ナショナルな文化」としての普遍性がベースにあることが考えられる²。

ここまでの先行研究の検討を通して得られた知見は、「真正性」を本質論的に論じるのはもちろ

ん、当事者による実践として称賛・批判するのは実がないことである。「真正性」は、外部への表象などの文脈において創造され運用される概念であり、間主観的なものである。観光イベントなどにおいては、当事者・観光者双方によって様々な要素が「こじつけ的」に組み合わせられている。さらに、観光という文脈においては、「真正性」は「ブラックボックス」と化す。

これらの知見を踏まえ、本論では御柱祭についての観光イベントの分析を行う。次章ではまず御柱祭についての概説を行う。

3. 御柱祭概説³⁾

諏訪と諏訪大社

長野県のほぼ中心に県下最大の湖である諏訪湖がある。その周囲から南東の八ヶ岳への広がる地域が諏訪である。北西から岡谷市、下諏訪町、諏訪市、茅野市、原村、富士見町の3市2町1村がある。諏訪湖周辺は温泉地として有名であり、蓼科中央高原や八ヶ岳中央高原は別荘地として知られている。他方、中小の精密機械メーカーが集まる工業地帯でもある。6市町村の現在の総人口は19万人ほどである。

諏訪湖の南北に諏訪大社上社と下社がある。上社は本宮（諏訪市）と前宮（茅野市）、下社は春宮（下諏訪町）と秋宮（同）から成る。全国各地にある諏訪神社の総本社であり、最古の神社のひとつとされる。諏訪大社の神社祭事に奉仕するのは、諏訪地域に住む氏子である。上社の奉仕地域は、諏訪市の湖南・四賀・豊田・中洲地区と、茅野市、原村、富士見町、下社は、岡谷市、下諏訪町、諏訪市の上諏訪である。

御柱祭

御柱祭は寅と申の年、数えて7年目ごとに行われる諏訪大社の式年遷宮祭である。境内にある2対の御宝殿のうちのひとつを建て替え、新造された方に収蔵物を遷御する。

御宝殿造営に合わせ、その四方に建てられた御柱と呼ばれる木製の柱が建て替えられる。かつての造営は、社殿すべてを対象とするものであったとされるが、室町時代以降、造営の規模が縮小し、御宝殿と御柱のみが対象となっていった。江戸時代以降、御柱の建て替えが祭事を中心になっていくことで、御柱祭と呼ばれるようになったとされる。

御柱となる樅の木は、伝統的に上社下社それぞれ決められた森林から伐採される。上社は八ヶ岳山麓御小屋山の社有林、下社は東俣国有林である。伐採された御柱は出発地点にトレーラーで

2 野村が指摘するように、「オーセンティシティの追求など端から気にしないスタイルが現代観光のデフォルトになっている場合も—とりわけ若者の間では—珍しくない」（野村 前掲）ためとも考えられる。

3 御柱祭全体の詳細については拙稿（石川 2015）を参照。

運ばれる。以後、御柱を建立する「建て御柱」までのほぼすべての行程が人力作業によって行われる。御柱は最大で20メートル以上、重さ10トンを超える巨木である。

御柱祭と観光

諏訪大社の御柱祭は、江戸時代から多くの見物人を集める祭りであったとされる。特に、人を乗せたまま坂から御柱を落とす「木落し」や、御柱を川に入れ、対岸へ引き上げる「川越し」などの行事が明治時代以降注目されていく⁴。2016年には158万人が観光に訪れた⁵。

他方、近年は「小宮祭」の観光資源化も盛んである。小宮祭とは、諏訪地域の各神社で催行される御柱祭の通称である。開催時期は様々だが、9月から10月の例祭に合わせて御柱の建て替えを行う場合が多い。そのなかには、観光客の参加や見学を許可するなど、観光化に積極的な祭りもある。

御柱の開催年は諏訪地域を訪れる観光客数が例年に比べて増加するとされるが、4、5月の開催時期に集中する傾向があった。小宮祭は、諏訪地域を再び訪れてもらうような、「通年観光」を狙った観光商品として生み出されたと考えられる（諏訪地方観光連盟 2004）。

では、諏訪大社と小宮祭に代表される諏訪地域の観光商品「御柱祭」はどのようにPRされているのか。次章では、御柱祭への誘客を目的として観光イベントについて論じる。

4. 「御柱祭」を表象する観光イベント

本論における「観光イベント」の定義

観光イベントについての明確な定義はないと考えられるが、本論においては、橋本和也（橋本 1999：12、2011：9）の観光についての定義を参考として、「観光者にとっての異郷において、その地に関わる上演者⁶が、その地の文化的なるものを、観光者の趣向・目的に合うという目論見のもとに施された演出⁷に従って行う催し」と便宜上定義しておく。

御柱祭in赤坂サカス

分析対象となるイベントは、平成21（2009）年9月21日、東京都港区赤坂で行われた「御柱祭in赤坂サカス」である。

このイベントは、東京都港区赤坂5丁目にある複合施設、赤坂サカスの屋外イベントスペース、

4 下社木落しの変遷については拙稿（石川 2015：244-250）を参照。

5 信濃毎日新聞2021年11月17日。

6 関わり方については濃淡があり、観光業者など、その地への日常的な関わりの薄い者が行う場合がある。

7 上演者の意向が完全に反映されているとは限らない。

「Sacas広場」において開催された。イベント主催者は6市町村による共同組織、諏訪地方観光連盟（以下は観連）である。本部は諏訪市役所観光課内におかれている。イベント開催時の会長は諏訪市長が務めていた。イベントの目的は、御柱祭を中心とする諏訪地域、およびその周辺地域の観光PRであり、御柱を運ぶ「曳行」のデモンストレーション、木遣り唄体験、抽選会、物販などが行われた。また、TBSテレビの2つの情報番組の生中継が行われた。

イベントの参加者（上演者）は、諏訪地域からバス等でやってきた諏訪大社の氏子ら総勢200名ほどであった。模擬御柱とともにやって来た富士見町の東三区（落合、境、本郷）⁸の氏子165名、御柱祭において歌われる木遣り唄⁹の歌手である富士見町木遣り保存会の会員6名と、富士見町落合の新田子供木遣り隊¹⁰7名、主に下社の御柱祭で「神賑わい」¹¹の長持を披露する下諏訪町第10区の富部長持ち会16名が参加した。

ステージでのイベントには、観連の関係者のほか、司会を務めた信越放送¹²アナウンサー1名、観連のオーディションで選ばれた御柱観光大使3名のうちの2名、岡谷市と原村のマスコットキャラクターがそれぞれ1体登場した。さらに、御柱の先端部のレプリカや御柱祭のポスター¹³が展示されたほか、諏訪地域に隣接する立科町¹⁴の宣伝ブースが設けられ、立科町白樺高原のマスコットキャラクター1体もステージに登場した。松本市や長野県内の他の地域の観光情報を記載したパンフレットなども頒布されていた。

会場のほぼ中心、やや後方に模擬御柱が設置され、「模擬御柱パフォーマンス¹⁵」が行われた。向かって右手にある常設のステージでは、「木遣り&キャラクターステージ」が、展示品と宣伝ブースは、ライブハウス「赤坂BLITZ」（現在は閉館）の1階のスペースに設置された。

8 富士見町の東南部にある三地区は通称「東三区」と呼ばれる。諏訪大社上社に8つある担当地区のひとつである。地区の表記順は御柱祭の度に輪番制で変更されるが、本論では平成22（2010）年の順番に合わせて記載する。

9 木遣り唄は御柱祭のあらゆる場面で歌われる歌謡である。木遣り唄の詳細については拙稿（石川 2015：177-208）を参照。

10 木遣り保存会は諏訪地域各地にあり日常的に活動している。年齢制限なく入会できる会もあるが、富士見町のいくつかの集落では町の保存会と別に、小中学生が参加する「子供木遣り隊」が御柱祭に合わせて結成される。

11 御柱祭において、祭りを盛り上げる余興の総称として用いられる言葉である。長持のほかに花笠踊りなどを指す。

12 長野県内を放送エリアとする放送局で、ラジオ・テレビ放送事業を行っている。司会を務めたアナウンサーは長野県出身で、イベント中は本郷地区の某集落の法被を着用していた。

13 上社と下社共通のポスター以外は、平成16（2004）年に東三区が担当した御柱のポスターが展示されていた。

14 上社御柱の用材不足に対応するため、2004と2010年は立科町内の山林から用材となる樅の木が伐採された。その関係からこのイベントに参加したと考えられる。また、2010年の上社御柱祭には、立科町の神輿が参加した。

15 リハーサルにおける司会者による説明では、「木遣りと模擬御柱の共演」という名前で紹介されていた。

模擬御柱パフォーマンスはすべての氏子が関わって上演された。木遣り&キャラクターステージには、富士見町木遣り保存会会員と新田子供木遣り隊が出演した。展示品と宣伝ブースでは、観連の職員などが来場者に対応した。

スケジュール

イベントのスケジュールは以下の通りである。

- 1) TBSテレビ番組出演2回：8：28～、14：48～
- 2) 模擬御柱パフォーマンス：10：25～、12：00～、13：00～、16：40～
- 3) 木遣り&キャラクターステージ、諏訪地方大抽選会：11：00～、15：00～

1) は約1分間の生中継であり、御柱祭とこのイベントのPRが行われた。2) について詳しくは後述する。3) はステージで一連のイベントである。木遣り唄が披露される合間にキャラクターが登場し、観光PRを行う。その後に抽選会が行われる。当選者3名がステージで記念品を贈呈される。さらに、木遣り唄を保存会員と一緒に歌うと、追加で豪華な賞品がもらえるという内容であった。

また、東三区と富士見町木遣り保存会は、9月6日と13日、富士見町の道の駅「蔦木宿」の駐車場で合同練習を行った。21日はバスで早朝に会場に入り、情報番組とイベントについてのリハーサルを行ったのち、イベントに出演した。

イベントに向けた練習

2009年9月6、13日の両日、富士見町境にある道の駅蔦木宿の駐車場において、イベントに向けた練習が行われた。東三区の氏子有志、富士見町木遣り保存会、新田子供木遣り隊が参加した。両日とも、駐車場に展示されている模擬御柱を用いて、イベント本番同様の練習が行われた。

本番を想定して、左右のメドデコ¹⁶に乗り手となる氏子が乗る練習を行った。6日は50名ほどと参加人数が少なかったため、御柱の両側に木材を置き、横滑りを防止したうえで、メドデコを左右に振る「練り」を実施した。木遣り唄に合わせて、メドデコに乗った氏子が「オンベ¹⁷」を振る一連の流れを確認した他、メドデコへ搭乗する際に、左右の動きのタイミングを合わせる練習

16 上社の御柱に取り付けられるV字型の丸太。前方だけでなく後方にも半分ほどの長さのものが取り付けられる。氏子が乗り、左右に揺らしながら曳行する。かつては横転防止や先端部の摩擦軽減などの機能があったとされるが、現在は装飾的な意味合いが強い。左右のメドデコにはそれぞれ綱が結ばれており、乗り手以外の氏子が引き合うことで左右に振れる仕組みになっている。

17 5、60センチメートルほどの棒の先に、薄く削った木や化学繊維の紐などの房を付けたもの。その名称は神職が持つ御幣からきていとされる。

も行っていた。その

13日は100名ほどの東三区の氏子有志、富士見町木遣り保存会、新田子供木遣り隊のほか、東三区の御柱祭の役員らも参加した。この日は本番を想定した練りの練習を行った。途中で乗り手を交代しながら、スムーズに乗り降りができるよう本番の流れを確認した。メドデコには、イベントでも使用する「諏訪大社御柱祭 富士見町 道の駅信州葛木宿」と入った横断幕が取り付けられていた。

このようなメドデコの乗り降りは御柱が進んでいる間にも行われる。乗り手はグループで動き、乗る位置も決められている。不安定なメドデコに乗り降りするためには練習が欠かせない。御柱祭本番に向けたメドデコ乗り練習は、上社の奉仕地域で祭りの前年から行われる。練習が行われる理由については明確でないが、その目的はメドデコに乗るという感覚をつかむことと、乗り降りをはじめとした連携を確認することであると思われる¹⁸。

2時間ほどの練習終了後、東京への輸送に備え、横断幕とメドデコが外され、模擬御柱はクレーンでトラックの荷台に積まれた。

模擬御柱パフォーマンス

写真1のように模擬御柱パフォーマンスは4回実施された¹⁹。この「演目」では、御柱祭本番では見られないヒトとモノの構成によって、御柱祭が表象されていたと考えられる。

ヒト（上演者）は東三区の氏子、富士見町木遣り保存会、新田子供木遣り隊と富部長持ち会である。モノは、「道の駅葛木宿」から移送され設置された模擬御柱（長さ約9メートル、直径約80センチメートル）、長持ち、祭り装束、その他道具各種である。

まず、10時からのイベント開始にあたり、東三区役員によって御柱祭に清祓いが行われた。これは、御柱祭本番と同様に安全祈願を目的としたものと考えられる。本番では諏訪大社神職によって行われる。続いて、観連の会長、長野県観光協会事務理事、富士見町落合地区大総代らによる開会式がステージで行われた。その後、模擬御柱の準備が行われ、1回目のパフォーマンスが始まった。

パフォーマンスは、上述した2回の練習と概ね同様の内容で行われた。まず、責任者による「搭乗」の掛け声で手順通りに係がメドデコに乗りこむ。木遣り唄のあと、氏子は「ヨイサ」と5回声を出す。その後、「ヨイテーコショ」の声に合わせて、メドデコを左右に動かす「練り」を行う。

18] イベントへの参加は御柱祭本番に向けた練習の一環と位置付けられていた可能性がある。筆者が調査を行った富士見町富士見地区では、御柱祭前年の年末から年初めにかけて、担当地区全体での練習が本格化する。前年の9月という時期は組織作りを行う時期であり、練習を行うのは稀である。このイベントはメドデコに関する係のみが関わっていたが、役員も多く参加しており、東三区全体で御柱曳行の流れを確認する貴重な機会であったと考えられる。

19] パフォーマンス1回にかかる時間は、全体で20分から23分ほどであった。



写真1 模擬御柱パフォーマンス



写真2 富部長持ち会の練り

乗り手はタイミングを合わせて前後にオンベを振る。司会者はスクリーンに投影された御柱祭の映像を用いて、御柱祭の概説を行う。模擬御柱パフォーマンスが終わると、御柱の後方に控えていた富部長持ち会の長持が動き出し、御柱の周囲を練り歩く²⁰。

長持

長持は、御柱の用具の運搬が作業から芸能に変化したものである。一般的な長持とは、衣服や調度品を入れるふた付きの長方形の箱のことを指す。諏訪地域における長持とは、長さ8～10メートルのヒノキ製の棹（担ぎ棒）を、木製の箱の上に通したものである。箱には集落名や町内名が書かれた色鮮やかな布が被され、箱の正面にはおかめの面や旗などが飾り付けられる。

担ぎ手は、前方に2人が基本となるが、4人の場合もある。後方は1人となる。担ぎ手は片手に杖を持ち、長持甚句に合わせて上下に棹を揺らす。棹のしなりによって「ギシギシ」と音を鳴らすことが長持ちの醍醐味である。また、重さを感じさせず平然と担いでいるように見せるのが粋であるとされる。通常は片手を棹に添えて担ぐが、熟練者は棹を肩に乗せてバランスを取ることができる。担ぎ手以外にも長持甚句に合わせて踊る。

長持は集落や町内の氏子によって演じられることが多いが、企業や同好会によるものもある。趣向を凝らした衣装や長持も見られる。担ぎ手は法被、腹掛け、股引き、足袋という出で立ちが基本であるが、隈取りのような化粧をしていたり、女装していたりするなど、連によって個性がある。根っこが付いたままの変わり棹を用いる連も見られる。また、子供連や女性だけで構成されている連もある。特に下社では長持が盛んであるとされ、里曳き祭の神賑わいパレードには100近い長持が登場する（石川 2015：64）。いくつかの長持の団体は、御柱祭以外のイベントに登場するなど日常的に活動している。

20 4回の平均時間は約10分間であった。

5. 表象される御柱祭

イベントのすべてを記述したわけではないが、ここまで見てきたように、諏訪からやって来たヒトとモノによって、「御柱祭 in 赤坂サカス」が構成されていた。本章では、御柱祭本番とこのイベントに共通すると思われる点と、相違点について指摘する。

本番との共通点：曳行までの過程

東三区の氏子による、メドデコへの搭乗のかけ声、木遣り唄の歌唱、「ヨイサ」のかけ声から「ヨイテコショ」へ移行しての「練り」という、御柱を曳きはじめるまでの一連の過程は、本番と同様と考えられる。平成28（2016）年2月に実施された東三区の練習では、この過程がほぼ同様に行われていた²¹。すなわち、御柱が模擬であること以外、人員とその技術や歌唱方法、道具の使い方などの要素とその構成は、本番に限りなく近いと言える。

本番との相違点：木遣り唄の歌い手

他方で明らかな相違点が存在する。まず、模擬御柱に関わる上演者についてである。富士見町の東三区と富士見町木遣り保存会、さらに落合地区の新田子供木遣り隊という構成によって表象されるのは、東三区の御柱祭と考えられる。しかし、この構成は不自然である。

現在の御柱祭参加の単位は、明治11（1878）年時点の行政町村である。富士見町には、富士見、本郷、境、落合があり、富士見と「東三区」は別々に上社御柱祭に参加する。富士見は北側に隣接する茅野市の金澤と担当地区を構成する。無論、それぞれの地区に居住しているか、生家があるなどの関係性をもつ木遣り師によって木遣り唄が歌われる。

富士見町木遣り保存会の参加者のうち、会長を含む3名が富士見、残り3名が東三区の所属（居住者）であった。すなわち、富士見の木遣り師が東三区の御柱に対して歌うという、本番ではありえない状況があったのである。

富士見町木遣り保存会は、東三区・富士見の区別のない富士見町民による組織である。富士見地区居住で、2010年の御柱祭では富士見地区の木遣り長を務めた保存会会長のS氏は、イベントへの参加について、「保存会に要請があった」「木遣りは保存会として参加するため、富士見地区の人たちも行く」と述べている²²。

ここまで見てきたように、本番ではあり得ないヒトの構成によって、上社の御柱の曳行が表象されていたことが確認できる。

21 2016年2月27日、本郷地区の立沢構造改善センターで行われた東三区総合練習での調査より。約1か月後の本番を想定して、曳行中に乗り手が交代する練習を行っていた。

22 2009年9月3日、富士見町木遣り保存会練習にて聞き取り。

本番との相違点：上社のモノと下社のモノ

写真2は、富部長持ち会の練りである。この様子をすぐ横で見守る東三区の氏子は、物珍しさを感じていたかもしれない。なぜなら、見慣れない下社の長持だからである。

先述したように、上社と下社は御柱祭の日程が異なる。御柱に付随する「神賑わい」としての長持は、本番の文脈を踏まえたものである。しかし、上社の御柱と下社の長持は本番では決して遭遇しないモノである。

本番との相違点：その他

その他にも本番では見られない構成があった。ステージイベントでは、木遣り唄の独唱が行われた。木遣り保存会の活動において、独唱は珍しいものではない。木遣り唄の練習においても独唱が基本である。地元のイベント、集落の集まりなどでは独唱で歌われることが多い。しかし、本番では、前半を一人で、後半を全員で歌う、部分斉唱が中心であり、独唱は限られた場面のみでしか行われない。このイベントの演出から、「木遣り唄は一人で歌うもの」と伝わってしまった可能性がある。

模擬御柱パフォーマンスの合間には、観光客だけでなく、TBSのアナウンサー、富部長持ち会の会員が模擬御柱やメドデコに乗る姿が見られた。担当地区によって対応は異なるが、御柱やメドデコに乗れるのは担当する地区の氏子のみという原則がある。「本物」でない模擬御柱であったからこそと考えられるが、「御柱は誰でも乗れるもの」と解釈された可能性がある。

情報番組中継とイベントにおける齟齬の修正

ここまでイベントと本番での構成の違い、いわゆる「齟齬」について論じてきたが、イベントを運営する側もこのような齟齬を理解していたと考えられる。

午前中に行われた情報番組への約1分間の出演は、練りを行う模擬御柱の生中継と、諏訪地域のケーブルテレビ局LCVが提供した下社木落しのVTRが組み合わせられたものであった。そのなかで、アナウンサーがイベント内容と御柱祭についての簡単な説明を行った。VTRは下社の御柱であること、現在赤坂サカスにあるのは上社の模擬御柱であり、メドデコは上社のみで下社にはないことの説明が行われ、出演は終了した。上社の模擬御柱の中継と下社のVTRという齟齬がある状況について、アナウンサーによる口頭説明で補足したと考えられる。

イベント中においても司会者が「この模擬御柱は上社のもの」との説明を断続的に行っていた。主催者側は、このイベントの構成が御柱祭を表象することにおいて「不自然」であることを認識していたと考えられる。少なくとも上社と下社の違いに注意を払っていたことは確かである。

6. まとめと考察

「御柱祭 in 赤坂サカス」においては、本番ではあり得ないヒトとモノの構成が見られた。担当地区以外の木遣り唄の歌い手、上社の模擬御柱と下社の長持の共演である。

本論では一部の内容しか検討することができなかったが、このイベントは、御柱祭について多少なりとも知っている立場からすると、口をはさみたくなるような構成で行われていた。御柱祭の「本番」では決して出会うことのないヒトやモノが構成されることによって、観光イベントにおける「御柱祭」が表象されていたのである。今後の課題となるが、イベント毎に、観光商品としての「御柱祭」が異なる構成で生み出されていると推察される。

他方で、御柱祭の参加者（氏子）が、イベントの文脈に沿った上演者という立場を理解し、演出された役を演じているということが指摘できる。当事者が「セルフパロディ」を演じるかのようでもある。イベントで表象される「御柱祭」はまさに「シミュラークル」と言えるもので、これを「真正性」という概念で検討するのは適切ではないと考えられる。

主催者だけでなく、おそらく上演者も構成の齟齬に気が付いていたはずである。実際に、観光イベントに動員できるのは、限られたヒトやモノである。模擬御柱は上社で多く作成されるが、下社地域では少ない。日常的に活動する長持の団体は下社地域に多い。このように、動員できる要素に偏りがあるため、「こじつけ」的な構成にならざるを得なかったと考えられる。誘客を目指す観光イベントを構成するため、限られた資源を運用し、御柱祭を「適切」に表象しようとする実践が行われていたのである。

おわりに

本論では、上演者が観光イベントについてどのように考えているのか、という点について言及することができなかった。上演者は「割り切っている」、すなわち、本番とは区別されたものとして、観光イベントでの「上演」を認識していると、現時点での仮説を立てておく。イベントに参加した当事者の認識を明らかにすることが今後の課題となる。

イベントを訪れた観光者の認識を明らかにすることも必要である。矢野晋吾が指摘するように、祭礼が多様な要素を取り込み、その構成が複雑化するなかで、御柱祭に対する当事者と観光者の「価値観」のズレが大きくなっていると考えられる（矢野 2021：146-147）。観光者が求める御柱祭の「素朴さ」や「荒々しさ」と、当事者がもつ価値観が乖離していることは想像に難くない。

さらに、今後検討すべきは、2022年度の諏訪大社御柱祭の観光客誘致の状況である。現在は新型コロナ禍という状況が観光の現場を覆いつくしている。何を観光商品化し、どのように構成し、「御柱祭」を表象するのか。当地を訪れることは難しいかもしれないが、できうる限りの調査によって明らかにし、改めて論じることとしたい。

引用参考文献

石川俊介

2015、諏訪大社御柱祭の文化人類学的研究—祭礼の存続と民間信仰—、名古屋大学大学院文学研究科平成26年度博士論文。

周菲菲

2021、「匠の精神」を消費する—訪日中国人観光客の「遊学」ツアーと伝統の再創造、文化人類学、86巻1号、25-43。

スミス、ヴァレン・L編

2018、ホスト・アンド・ゲスト—観光人類学とはなにか—、市野澤潤平・東賢太朗・橋本和也監訳、ミネルヴァ書房。

諏訪地方観光連盟

2004、平成十六年 諏訪地方小宮御柱祭ガイド。

高岡文章

2021、観光は「見る」ことである／ない—「観光のまなざし」をめぐって、くみる／みられるのメディア論—理論・技術・表象・社会から考える視覚関係、高馬京子・松本健太郎編、ナカニシヤ出版、41-52。

野村明宏

2014、観光と文化—真正性をめぐって、現代文化を学ぶ人のために、井上俊編、世界思想社、194-208。

橋本和也

1999、観光人類学の戦略、世界思想社。

2011、観光経験の人類学—みやげものとガイドの「ものがたり」をめぐって、世界思想社。

橋本裕之

1996、保存と観光のはざまで—民俗芸能の現在、観光人類学、山下晋司編、新曜社、178-188。

ボードリヤール、ジャン

1992、象徴交換と死、今村仁司・塚原史訳、筑摩書房

マーキャネル、ディーナ

2012、ザ・ツーリスト、安村克己訳、学文社。

矢野晋五

2021、諏訪地域における御柱祭の変化と継承—“観光資源”化と“伝統”のせめぎ合いのなかで—、変貌する祭礼と担いの仕組み、牧野修也編、学文社、117-152。

山下晋司編

1996、観光人類学、新曜社。

山田慎也

2015、地域おこしとしての雛祭り—徳島県勝浦町のビッグひな祭りの事例を通して—、国立歴史民俗博物館研究報告、第193集、95-112。

和崎春日

1999、生活と宗教—生活戦略としての宗教、文化人類学講義—文化と政策を考える—、宮本勝・清水芳見編、八千代出版、105-123。

赤坂サカス、<http://sacas.net/>、2021年11月9日確認。

諏訪地方観光連盟、<https://www.suwa-tourism.jp/>、2021年11月9日確認。